

「海賊と呼ばれた男」百田尚樹著 講談社 上／下

百田尚樹（ひやくた なおき）

1956年大阪生まれ。同志社大学中退。関西の人気番組「探偵！ナイトスクープ」のチーフ構成作家。2006年「永遠の0」で小説家デビュー。本書で2013年「本屋大賞」第一位を獲得。

「この物語に登場する男たちは実在した」

国岡鉄造（出光佐三）は、明治18年（1885年）福岡県宗像郡赤間村に生まれた。最後の内乱である「西南の役」は8年前に終わり、明治の足固めが始まった頃であった。この年、初代総理大臣に伊藤博文が就任した。鉄造の父、徳三郎は染物業を営み、赤間村では有数な裕福な家であった。徳三郎は8人の子供たちに「一生懸命働く事」「質素である事」「人の為に尽くすこと」の三つを厳しく教え込んだ。母の稲子はおとなしい従順な人であったが、一旦こうと決めたら、頑として意思を曲げない女であった伝えられている。鉄造の高等小学校の卒業時の成績は、学業「乙」、業績「乙」、挙動「静粛」、体格「虚弱」体質「近視」とある。14歳で高等小学校を卒業し、中学へ行きたかったが、父は反対した。この翌年、福岡に商業学校が新設された。其処に鉄造は父に黙って受験し合格した。父は反対せず許してくれた。博多にある父の取引先であった紺屋の二階に下宿し、父の仕事を手伝いながら勉学に励んだ。そして、短艇部に入部し玄界灘の波の荒い海で体を鍛えた。勉強の方も4年生で3番という好成績を残した。鉄造は日本で二つしかない高等商業学校の一つである新設の神戸高商（現神戸大）を受験し合格した。卒業論文のテーマは「筑豊炭田の将来」で、石炭の将来を案じ、石油の将来性を熱効率の点で有利と論じた。そして、国家の統制に対する批判について論じている。就職は、合格した鈴木商店を蹴って、従業員3人の小麦と機械油販売の坂井商店に皆の反対を押し切って就職した。鉄造は、大きな会社で歯車の一部になるより、商売の全てを習得したかったのである。街で第八車を引いて小麦粉を売っている鉄造を、神戸商高の卒業生は呆れていた。一年後、鉄造は台湾への出張を命じられた。台湾へ小麦を販売する為であった。台湾から日本へ物資を運ぶ船の帰り船に小麦を積むことで運賃を大幅に値下げして貰う事を鉄造は考え、台湾で小麦を安く売る事が出来た。台湾での主な販売元であった三井物産を慌てさせた。台湾での帰り、鉄造は実家を訪ねると、父は商売に失敗し夜逃げ同前で戸畑に引っ越していた。鉄造はカネが必要であった。彼は独立したいと思い、神戸商業時代、その息子の家庭教師をしていた白田重太郎に相談した。白田は京都の別宅を売却して、（1）

6000 円のカネを提供してくれた。しかも「返す必要なし、利子も不要、事業報告もいらない」という破格なものであった。鉄造にとって白田は死ぬまで恩人として尊敬する人となった。鉄造は、門司で機械油の販売会社を立ち上げた。そして「土魂商才」を座右の銘とした。業績は浮き沈みがあったが、ポンポン船という小型漁船用エンジンの燃料に軽油を使う事を見つけ出す。当時は灯油を使っていた。その方が値段が高く、しかも灯油には税金がかかっていたが、軽油には掛からなかった。石油販売会社の戦略であった。その上、そのエンジンの潤滑油には鉄造の考案した機械油が使われていた。これを組み合わせて売る事で売り上げも効率も上がったのである。門司の対岸にある下関にある山神組（現日本水産）に売り込んだ。しかし問題が発生した。元売りの日邦石油の特約店契約で門司の店は下関で商売してはならなかったのである。そこで鉄造は、海上で取引する事にした。門司と下関の特約店は、国岡商店の傳馬船を「海賊」と呼んで恐れた。40 年後、鉄造が海賊として世界をあっと言わせる事になるとは誰一人知る由もなかった。

世界第一次大戦が始まった。鉄造は満州に進出する事を決意する。満鉄に機械油を納入する事を計画するが、当時満鉄は外油が完全支配していた。満鉄本社では全く相手にされず、鉄造は、日本人技術者の紹介で、現場の機関車の車庫を回って話を聞いて回った。そこで、外油が寒さに弱い事を知った。マイナス 10 度までなら差がないが、それ以上になると外油は急速に粘度を増す。マイナス 20 度になると、車軸油が凍結する。すると車軸が焼けて使い物にならなくなる。長春のヤマトホテルに満鉄の技術者、用度課の人達に混じってスタンダード石油とヴァキューム社とテキサス石油の男たちが集まっていた。国岡の油と外資の油の寒さに対する実験をする為であった。その結果、マイナス 20 度で凍らなかったのは国岡の油だけであった。そして実際に機関車を走らせての実験でも国岡の油は勝利した。その結果、満鉄の車軸油は全て国岡の新しい車軸油に切り替えられた。

鉄造の妻ユキは、子供が生まれないのを理由に離婚を申し出た。鉄造はそれを了承した。其の後、知人の紹介で山内多津子と再婚した。時は昭和になっていた。昭和 2 年 4 月鈴木商店が破産した。昭和金融恐慌の始まりである。この時、鉄造は多津子との間に初めての息子を得る事が出来た。鉄造は 42 歳になっていた。国岡商店も金繰りに苦勞していた。しかし、メインバンクの旧二十三銀行、後の大分合同銀行のお蔭で何とか窮地を脱した。高橋大蔵大臣の大英断で金融業界も徐々に業績を回復して行った。だが、昭和 4 年ウォール街で起きた株の大暴落を切っ掛けに世界大恐慌が始まってしまった。

昭和 15 年 3 月、上海に、鉄造は最大 1 万 3 千 kl のタンクを始めとして、(2)

合計 9 基、総計約 3 万 KI のタンク群を竣工させた。又念願であったタンカーを完成させ、それに「日章丸」と名付けた。その後、東京の海軍航空本部から上海のタンクを使用したいという申し出があり鉄造はその内の 3 基を無償で貸すと申し出た。「日独伊三国同盟」が結ばれ、日本は米英と敵対関係に入った。アメリカは航空機用高オクタン価揮発油の輸出を禁止した。日本政府は石油統制を強化し、国営の統制会社（石統）を設立させた。国岡は満州と中国に主力を移す。海外の支店・出張所は 50 を超え、店員も 600 名近くになっていた。そしてそれぞれを株式会社にした。鉄造は元々、責任の所在があやふやになるとして株式会社に反対であった。そして、官庁や銀行からの天下りを許さなかった。個人商店とその従業員という大家族主義の組織を理想としていた。個人商店の下に株式会社を置き、本社を東京に移した。昭和 16 年 7 月とうとう恐れていたことが起こった。アメリカが日本への石油全て禁止したのである。当時日本は原油の 8 割をアメリカから輸入していた。鉄造は「日本は即死する」と言った。陸軍はスマトラ島のパレンバン油田の占領に成功した。この油田の産出量は、当時の日本の年間消費石油量を上回るほどだった。問題になったのは占領地区の石油政策であった。この地に石油を供給する国策会社をつくる必要に迫られた。蘭印、マレー、シンガポールの現地人にも揮発油を供給しなければ彼等の生活が成り立たなかったからである。南方軍の作成した計画は 2500 名で構成され官僚組織そのものだった。東京の陸軍省燃料課の中村大佐は、鉄造に会い彼に任せる事を決意する。鉄造は 200 人で十分だと言う。この会社の「壮行の辞」には、国家に尽くす大使命の為には、国岡商店の立場を顧みる事は不要である。とまで書かれていた。鉄造の心の中には国家の事しか無かったのである。最終的に国岡商店は、比島、ビルマ、マレー、スマトラ、ジャワ、ボルネオの各地に、陸軍に 148 名、海軍に 166 名の店員を送り出した。遂に日昇丸も海軍に徴用された。商船は日本に資源を輸送中、次々と沈められ、日昇丸も後に戦没した。それがアメリカの戦略であった。昭和 20 年 8 月、原子爆弾が広島、長崎に落とされ、8 月 15 日遂に日本は降伏した。この時日本の備蓄石油はゼロであった。日本は石油で戦争を始め、石油で戦争を終えたのである。

国岡商店は戦争中、活動の大部分を海外に置いていた。戦争に負けたと言う事は、それらの資産が全て失われるという事を意味していた。日本は自治権を失い全て GHQ の管理下に置かれた。国岡商店は、石油を手に入れるルートを失い開店休業の有様であった。しかも外地から店員たちが続々と戻ってくる。800 名を超える彼等にどうやって給料を払っていくのか。役員たちは鉄造に首切りを勧めたが、鉄造は一人の馘首も許さなかった。「店員は家族同然だ」と言うのがその理由だった。

国岡商店はあらゆる仕事を探し、定置網の権利を取得し、漁師をする者、海軍の通信隊に居た者を雇いラジオの修理さえした。石油の輸入が GHQ によって阻まれている事から、誰もその大変さから手を出さなかった旧海軍の燃料タンクの底から泥交じりの油を採取する仕事を請け負った。困難を極めた。人体に危険な気体を発生させるし、タンクの底は、深く暗く暑かった。雇った人夫に逃げられ、店員自ら裸になってタンクの底をさらった。この経験が後の苦しい事態を乗り越える「魂」と「団結」になった。国岡商店は創業以来、5 つの社是があった。「社員は家族」「非上場」「出勤簿は不要」「定年制は不要」それに「労働組合は不要」と言うものだった。この後、日本の石油政策、GHQ と日本政府、それに癒着する「旧石統」メンバー達と国岡商店との戦いが続く。又、GHQ のバックには、日本の石油を独占しようと企むメジャー達が居た。この中で、国岡商店は石油の自由化と原油確保を目指して彼等と闘う事になる。

昭和 23 年、外油の「カルテックス」は、国岡商店と提携したいと言って来た。カルテックスの話では、石油はいずれ自由化される。それに石統公団はまもなく解散になるとの情報をもたらした。国岡としては、カルテックスと提携すれば石油は幾らでも手に入る美味しい話であったが、最後の詰めで、カルテックスは、株式の譲渡と役員を送り込みを要求して来た。国岡はそれを拒絶した。その後、カルテックスは日邦石油と提携し、株式の 50%、そして多数のアメリカ人役員が日邦石油に送り込まれた。国岡商店に石油製品を供給していた日邦石油は日本の会社ではなくなったのである。

公団は解散し、石油の元売り会社が石油製品の輸入・販売が出来るようになった。しかし元売り会社の条件に、石油タンクを所有する項目があり、鉄造は絶望的な気持ちになった。だが、運命の女神が居た。国有財産として接收されていた旧三井物産の貯油施設が公開競売だったのである。鉄造は東京銀行から 4000 万円の融資を受け入札に参加した。そして落札出来たのである。元売り会社に指定された翌日、鉄造は日邦石油から「今後一切の関係を断つ」という通告を受け取った。

昭和 25 年日本経済はデフレの嵐が吹き荒れ、不況に見舞われた。「ドッジライン政策」が昭和 24 年から実施された為であった。その時大事件が勃発した。朝鮮戦争が始まったのだ。「特需」が不況に喘いでいた日本の工場を立ち直らせた。石油業界も例外ではなかった。しかし鉄造は、この戦争は何時か終わる。この時の事を考え、日本の石油が外油に独占されないために、タンカーを持つべきと考え、要望書を政府に提出した。そして、「第 6 次新造船追加計画」として 2 隻のタンカーの建造が認められる。その内 1 隻は飯野海運に決まり、 (4)

あと一つの枠を共栄タンカーと国岡商店が争い、運輸大臣山崎猛の決断で国岡に決まった。鉄造は、18,774 トンという日本最大のタンカー建造を発表し、設計は播磨造船に発注し、船名は「日章丸」とした。昭和 26 年 12 月、日章丸は完成した。処女航海はサンフランシスコで、そこから重油、軽油を日本に運び、国岡商店のタンクに次々と注ぎ込まれた。遂に、外油の圧力で阻止されていたガソリンの輸入が実現したのである。アメリカで売られていたガソリンはオクタン価が高く、しかも安価であった。外油はオクタン価の低いガソリンを日本で高く売っていたのである。鉄造のガソリンは「アポロ」と名付けられ「箱根の山をエンストなしで越えられる」と評判になった。しかし、鉄造の供給元であったアメリカの中小石油会社に「セブン・シスターズ」7 人の魔女と呼ばれるメジャーの手が回り、石油を売ってくれなくなった。

昭和 27 年、鉄造の弟正明は、ブリジストンタイヤ社長石橋正二郎から一人のイラン人を紹介された。イランは埋蔵量世界一で、戦後は年間 3000 万トンの原油を産出し、アメリカを抜いて世界の原油産出国となっていたが、その油田はイギリスが開発したもので、長年にわたりイギリスの国策会社アングロ・イラニアン（現ブリティッシュ・ペトロリウム）のものだった。しかし、1 年前の 1951 年、イランは石油国営化法案を国民議会で通過させ、その全施設を接收したのであった。イギリスはこれを認めず、軍艦をペルシャ湾に出動させた。イランは世界に向けて石油を売りだそうとしたが、イギリス政府は「イラン石油はイギリスのものだ」と宣言し、国際司法裁判所に提訴した。更に各国に「イランの石油は買わないように」と警告を発した。又、セブン・シスターズもイラン石油をボイコットした。紹介されたイラン人は、イランの石油はイラン国民のもので、貴方達がイランの石油を買う意思と勇気を持っているなら、国際価格よりはるかに安く石油を手に入れる事が出来ると告げた。正明は兄鉄造に相談したが、鉄造は「いかん。盗品は買わん」という言葉を了承し、断りの電話を入れた。それから 4 か月後、情勢が変わった。アメリカがイランと技術援助協定を結んだのである。これはアメリカがイランの石油国営化を認めたのと同じであった。今までイギリスが押さえていたイランの石油にアメリカ資本が進出しようとしているのであった。

オーストラリアの金鉱発見で大きな財産を手にしたイギリスの探検家ダーシーは、1901 年ペルシャ国王シャーの許可を得て、油田探掘に取組み、7 年間も苦勞して遂に中東部の大油田を掘り当てた。その石油利権をアングロ・ペルシャ石油会社が引き継ぎ、パイプライン、精製工場を建設し、巨大な石油会社を作り上げた。そして石油界のビッグ・スリーの一つになった。鉄造はイラン石油国営化について調べさせた。

ダーシーが時のペルシャ国王から得た権利は、ペルシャの国土の2/3に及ぶ広大な地域での石油採掘、販売、輸出を全て含むもので、その代価としてダーシーが国王に渡した金は、僅か8000ポンドに過ぎなかった。それと事業純益の16%を支払うと言うものであった。第一次大戦中、イギリスはアングロ・ペルシャ石油会社の株式の52.55%を買収し、同社を半国営会社とした。これ等の収益は、殆ど国王一族が独占し、国民はそれを享受する事が出来なかった。しかもイギリスは16%の契約もあやふやにし、他の中東諸国へ支払われる1/3と不当に安いものになっていた。鉄造は、泥棒はイランではなく、むしろイギリスではないかと確信した。1950年代、イラン国民の間で「イランの油田を国営化する」という運動が起こった。親英派の首相は暗殺された。民族主義者であるモサデク率いる国民戦線は、油田国有化の先鋭的な存在だった。1951年、モサデクは首相に任命された。石油国営法案可決し、アングロ・イラニアンの接收を開始した。モサデクはイギリスが軍事行動を起こすなら、イランはソ連に近づき共産化するとアメリカに警告した。アメリカはイギリスに自制を求めた。それは、アメリカが、イラン石油資源に食い込む為という側面もあった。イギリスは国際司法裁判所で争おうとしたが、イランは出廷を拒否した。困ったイギリスは、経済封鎖をすることにし「イランと取引をする者に対しては、必要と思われるあらゆる措置をとる」と警告した。そんな時、イランの原油を積んだイタリアの「ローズ・マリー号」がイギリスの海軍に拿捕され、イギリス植民地のアデンに強制入港させられ、積荷(原油1000トン)を差し押さえられた。

ニューヨークにあるコンサルタント会社のメンバーが鉄造にコンタクトして来た。彼が言うには、「イラン石油を買い付けるチャンスは今だ」と言う事だった。それは、ハーグの国際司法裁判所がイランに有利な決定を下したと言う事だった。鉄造等はこの情報は全く知らなかった。当時の日本はそんな状況であった。アメリカはイギリスとの関係上動けない。しかもメジャーはイラン石油をボイコットしている。だから、鉄造に近づいて来たのである。勿論成功報酬は莫大なものだった。鉄造は、国際カルテル包囲網もがいている国岡酒店とイランは同じ状況にある。イランの苦しみはわが社の苦しみである。と考え、アメリカのコンサルタント会社と契約したのである。国岡商店はイラン石油購入に向けて本格的に動き出した。しかしこれは勇気だけでは解決出来ない茨の道の始まりであった。

国際石油カルテルは「イランの石油を輸送するタンカーを提供した船会社とは今後傭船契約を結ばない」との通告を発していた。鉄造は、正明と部下に「テヘランに行け」と指示した。モザイクと直接交渉する為であった。イラン行きは極秘事項であった。セブン・シスターズに知られてはならなかった。(6)

当時、海外渡航は簡単に許可がおりなかった。まず、外貨割り当てが認められなければならなかった。又、イランはサンフランシスコ講和条約を結んでいないため、第三国経由で入国しなければならなかった。そこで、パキスタンを経由地としたが、その目的はオート三輪を販売する事にし、パキスタン大使館にビザを申請した。この時、モザイク首相はイギリスに「国交断絶」を通告した。鉄造はタンカーの手配に奔走していた。日昇丸を使う事は出来なかった。もし、イギリスに拿捕されたら、国岡商店は破産する。そこで鉄造は、飯野海運の日南丸をチャーターし、万一拿捕されたら国岡商店がその損害を引き受けると申し出た。正明と部下は、パキスタンのカラチに向け出発し、給油のため沖縄、バンコック、ラングーンに着陸し、20時間もかかってカラチに到着した。駐パキスタンのイラン大使館に向かった。ボロボロな建物であった。大使館員は二人の旅券にスタンプを捺すと、収入印紙を鉄で二つに切り、それぞれの旅券にその半分を張り付けた。イランの貧しい経済状況を垣間見た。大使館員の服の袖は擦り切れていた。二人は、テヘランに到着後、次の日首相官邸に向かった。そして、イラン首相モサデクのオフィス兼ベッドルームに通された。当時、シリアのクワトリ大統領、エジプトのナギブ首相そしてイランのモサデクは中東の三傑と言われていた。モサデクはC I Fの 20%引きしか認めなかった。2か月前のイランとの契約草稿では、C I Fの 30%引きを合意していた。正明にとって理不尽で且飲めない話であった。モサデクはイラン石油を買いたいと言う国 21 各国と契約したが、誰一人としてタンカーをイランに持ってきた国は居ないと言った。正明にとって意外な話であった。その 2 日後、オランダのハーグから帰国したばかりのイラン NO2 のハシビイが交渉相手になった。正明は国岡商店の日本での立場、民族系で、メジャーと闘っている会社である事を説明したが、中々信用してもらえずタフな交渉となった。ハシビイは最後に本音を漏らした。「もし、イギリスの封鎖を突破してタンカーを寄こすなら、我々は石油を即座に渡すであろう。支払いはその後でもよい」長い間、イギリスに搾取され、経済封鎖を受けて孤立しているイラン人の心の中の疑心暗鬼を正明は目のあたりにしたのである。正明は「契約後 60 日以内に必ずタンカーを寄こすと明言した。帰国後、直ぐ米国のコンサルタント会社に本契約の為の契約草稿作成を依頼した。その頃、東京では大事件が起こっていた。飯野海運が、日南丸のチャーターを断って来たのである。その原因は不明であったが、多分アメリカにある駐米大使館から日本の外務省に秘密が漏れ、それで飯野海運に圧力がかかったと思われる。鉄造は決断した。「日章丸をアバダンに送る」虎の子の日章丸が拿捕されたら、国岡商店は破産する。しかも、メジャーがもし日本に石油を送る事を止めたら、日本の消費者への供給は 70%の削減となる。大変な決断であった。鉄造は乞食になる覚悟をした。

その時鉄造の末娘はまだ12歳であった。

国岡商店は日章丸をイランへ派遣する為の具体的検討に入った。一番の問題は船長とその乗組員であった。彼等が乗船を拒否すれば全て御破算だ。一方正明はイランから帰国するなり、保険を取り付けるために奔走した。東京海上火災保険会社に向かい和田常務に面会した。戦争による損害の場合保険会社は免責される。その為、「戦争船舶保険」に入らなければならない。しかし再保険が問題であった。通常東京海上は、ロンドンのロイズに再保険を掛けるが、それでは秘密が筒抜けになる。そこで和田は、アメリカの保険会社に再保険を肩代わりさせる事にした。イランを追いつめるとソ連に助けを求め、共産化するのをアメリカが危惧していることを読んだからである。そして、再保険は下りた。次の壁は、イランに支払う外貨割り当てをどうするか、だった。通産省の輸入課の倉八課長に何とか外貨を割り当てて貰いたいと頼み込んだ。通産省の担当者は「船積場所」をアバダンと書けば、全てが露呈してしまことを恐れ「ドル地域」と書いてくれた。通産省もメジャーに対する鬱屈を溜めていたのである。

昭和28年3月、日章丸は神戸港を出航した。本当の目的地を知っているのは船長と機関長の二人だけだった。鉄造は船が見えなくなるまで見送った。4月5日、日章丸がコロンボ沖に差し掛かった時、本社から暗号無線が入った。「アバダンに行け」と書かれていた。新田船長は、全員をキャビンに集め、「今から本船は、本社の指令により、イランのアバダンへ向かう」と宣言し、店主からの手紙を読んだ。鉄造からの檄文であった。乗組員はそれを聞き、「日章丸万歳」「国岡商店万歳」「日本国万歳」と叫んだ。8日の午前5時、日章丸はホルムズ海峡に入った。ホルムズ海峡を抜けるとペルシャ湾に入った。アバダンはペルシャ湾の一番奥に位置していた。シャット・アル・アラブ河口から83km遡った所にアバダンはある。この河底を掘ったチャンネルと呼ばれる人口の水路を通過しなければならない。泥や砂が溜まった中、日章丸は水先案内人に導かれて進んだ。緊張して誰も言葉を発しなかった。1年以上もタンカーが行き来して居ない泥や砂が溜まった中を進んで行くのである。さらに進むと、無数のタンクが並ぶ精油所が見えてきた。世界一の製油所である。そして、港を取り囲む何万人と言うイラン市民が港に押しかけて来た。長い経済封鎖で困窮して来たイラン市民にとって、遥か極東の国から現れた巨大タンカーは救世主のように見えたに違いない。日章丸がアバダンに着いたというニュースは、AP電、ロイター通信によって世界中を駆けめぐった。新田船長の顔には笑顔が無かった。問題は復路に在ったからである。石油を積み込んだ日章丸を、イギリス海軍は死に物狂いで捕えようとするだろう。4月15日、日章丸はアバダン港を後にした。

新田船長はジグザグに航路を取り、2 日以上余分に時間をロスするマラッカ海峡を通らず、スマトラ島を南に迂回する航路を取った。一方日本では、イギリスが日本政府に嚴重抗議し、事件の真相調査を要求していた。日本政府は、私企業の合法的商行為であるとして、政府が介入する事は出来ないという見解を發表した。国民世論は圧倒的に国岡商店の側に付いた。しかし、日本での裁判は避けられない様相になって来た。アングロ・イラニアンは、日章丸が日本の領域内に入れば、直ちに仮処分申請をする手順を整えていた。鉄造は山口県の徳山に入港させると發表し、実は川崎に向かわせていた。日章丸からの 2 本のパイプを通じて、川崎港タンクの中にガソリンが送り込まれている中、鉄造は、乗組員一同に向かって深々と頭を下げ、「諸君らは、今、一つの歴史を作り上げた。国際石油カルテルに矢を打ち込み、日本人の誇りと、イランと日本の橋渡しを為し、日本の石油業界の未来に火を灯した」と言いながら、涙を流し続けた。後で分った事だが、英国海軍はアラビア海に駆逐艦 3 隻を配備していた。又、マラッカ海峡でも日章丸を待ち伏せしていたのである。新田船長は見事にその裏を搔いたのである。

日章丸がアバダンで三度目の積荷を終え、日本に向け降海していた 8 月、イランに衝撃的の事件が起きた。アメリカ CIA によるクーデターである。モサデク首相は身柄を拘束された。イタリアに亡命中だったパーレビ国王がイランに戻り、イランは再び王制になった。アメリカは国際コンソーシアムを作って、イラン国営石油会社を支配しようとしていた。モサデクの居ないイランは、コンソーシアムの要求をほぼ認める形で協定書に調印した。イランの国営石油会社が自由に処分できる石油量は、全生産量の 12.5%に過ぎず、しかもガソリンや軽油は国内の消費分以外認められなかった。そして今後、10 年間、アングロ・イラニアン社に対して、毎年 250 万ポンドという膨大な補償金を支払うと言うものだった。国岡商店との契約も解除された。彼等イラン人は、自分達の石油を、自分達で売る事も、価格も決める事が出来なくなっていたのである。

日本の石油市場を乗っ取られない為にも、鉄造は日本に製油所の建設を急がねばならないと思った。原油国から直接原油を仕入れ、それを精製して販売しなければならぬ。そこで目を付けたのが四日市の旧海軍の燃料廠跡地であった。だがそこは既に「イギリス&オランダ」対「アメリカ」の国際企業の代理戦争の様相を呈していた。そこで鉄造は、徳山の旧海軍の燃料廠跡地を狙った。しかしそれには凄まじいカネがかかる。日本の銀行からは全て拒否された。そこで鉄造は、バンク・オブ・アメリカから融資を仰ごうと、アメリカに出張し、成功した。

しかも、資本金の 18 倍である 1000 万ドルという破格なものだった。この交渉の後、ピッツバーグを訪れ、メロン財閥のガルフ本社を訪ねた。ガルフはクエートに力を注いでいたが、その販売先を求めて苦勞していた。将来の原油取引についての有意義な会談を終えた後、鉄造はシカゴに飛んだ。目的は、アメリカの石油精製技術の開発会社である「ユニバーサル・オイル・プロダクト・コーポレーション」(UOP)を訪ねて、精製工場の建設を依頼する事だった。社長のベネバ自らが鉄造たちを出迎えてくれた。鉄造は見積もりも取らず「仮契約をする」と言いベネマ社長を驚かした。「徳山で UPO が国岡商店の製油所建設を請け負う」というだけのものだった。信頼関係があれば見積もりや設計図、納期などは、後からで十分と言うのが鉄造の考えだった。

昭和 31 年 3 月起工式を済ますと、普通は 3 年～2 年半かかる工期を 10 ヶ月で完成させろという指示を鉄造は出した。建設本部長の東雲は、何度も工程を洗い出したが到底無理であった。しかし、何とか 1 年 4 カ月という工程を作り上げたが、鉄造には黙っていた。鉄造は 10 ヶ月で完成させるとプレス・リリースした。20 を超える業者と 2000 人以上の人間が工事現場に乗り込んできた。国岡商店の店員も東京から応援に駆け付け、現場の人々にお茶を配ったり、廃材の処理に当たった。請負の建設会社間のトラブルも一齋起きなかった。10 月に入ると、現場は日曜も休日も無くなった。昭和 32 年 3 月遂に奇跡が起こった。10 ヶ月で製油所が完成したのだ。UOP から派遣されたポッター技師長は、不思議な感動に囚われていた。自ら、「2 年以上かかる」と断言した工事が、僅か 10 ヶ月で完成したという事実が信じられなかった。鉄造はガルフからクエートの原油を輸入する 10 年契約をすると同時に、10 万トン級の大型タンカーを 2 隻チャーターする契約を成立させた。国岡商店の業績は急速に上り業界第 2 位に躍り出た。次に鉄造は、2800m のパイプをタンカーから直接岸に原油を流す工事を始めた。徳山の海が浅いため大型船が直接岸に付く事が出来ない為であった。こんな長いパイプを設置する工事は世界初めてであった。昭和 33 年、原油輸入、石油精製、販売の三部門を手にした。国岡商店は時の岩戸景気に乗り業績をさらに伸ばして行った。

鉄造のもとに、日田重太郎の病が重いとの知らせが届いた。癌だった。昭和 37 年 2 月、鉄造は日田の葬儀を故郷の淡路島で国岡商店の社葬として執りおこなった。1000 人以上の人が会葬に集まった。

この頃政府は、「石油業法」を成立させた。其の意向は、自由貿易に歯止めをかけ、石油業界を統制しようとするものだった。又、一方国岡商店を抑え込むためのものであった。徳山やそれを上回る千葉の製油所の規模拡大しつつあった国岡商店への恐怖から出たものであった。

昭和 37 年の暮、日本を異常寒波が襲った。日本海側の豪雪や寒さで 200 名を超す死者が出た。全国的に灯油が不足し、暖房の為の電力需要に火力発電所の重油が不足する事態になった。徳山製油所のタンクには有り余る重油がありながら、「石油業法」の為に販売できなかった。生産調整の失敗であった。政府は 38 年にも生産調整を続けようとしていたが、遂に鉄造は怒った。彼は、通産省と石油連盟に対して、正式に上半期の生産調整の撤回を要求した。しかし、通産省は動かず、連盟各社の中で生産調整を反対する会社は一つも無かった。鉄造は、全国支社店長を招集し、「生産調整を無視して、独自に生産計画を作れ」と指示した。そして鉄造は石油連盟を脱退した。103 万 KI の石油製品を販売し、国岡酒店始まって以来の記録を作った。遂に、時の通産大臣福田一が会見を求めて来た。彼は筋を通す骨のある政治家であった。鉄造は日本の石油業界の事情を説明すると同時に、国際カルテルの意向で日本の石油会社は動いていることを訴えた。大臣は、政府から「勸告」（営業停止）出すことも有り得ると圧力をかけたが、鉄造は「どうぞ、勸告を出してくれ」僕自身が国会に出向き訴えろと言った。大臣は逃げるように部屋を出て行った。結局、政府は勸告を発動しなかった。次に政府は、植村甲子郎に斡旋案を持たせ鉄造を説得しようとしたが、鉄造はその斡旋案を拒否した。彼は国岡商店の利益ではなく消費者の利益を優先したのである。そして遂に、鉄造は日本の石油市場の自由化を獲得した。「生産調整は出来るだけ早いうちに廃止する」という福田通産大臣の言葉を引き出したのである。しかし昭和 40 年になっても、生産調整は廃止されなかった。ガソリンや重油の不足が目立ってきた。丁度この時、大事件が起きた。全日本海員組合が賃上げを要求して大規模なストライキを起こした。ガソリンや灯油の品薄が深刻になった。生産調整がある為、石油製品が全国的に払底して来た。鉄造は決心し「直ちにフル生産にかかれ」と号令した。石油連盟の猛抗議も無視した。消費者団体、産業界は鉄造の行動を支持した。2ヶ月続いた海員ストが終わった時、鉄造はフル生産の停止を命じた。時の通産大臣であった三木は「石油の生産調整を撤廃する」と発表。国岡商店は石油連盟に復帰した。脱退していた3年間の会費一億円以上を鉄造は納め続けていたのである。昭和 41 年、本社を「帝劇ビル」に移した。そして「国岡美術館」を9階に開館した。鉄造が長年蒐集して来た膨大な美術品を展示する為のものであった。特に「仙厓」のコレクションは世界一の充実を誇った。新社屋に移転した翌日、弟の正明に社長を譲り、東雲を副社長に任命した。鉄造は会長になった。この年、かねてより建造中のマンモスタンカーが完成した。この船は「国岡丸」と命名された。鉄造は、軽井沢の別荘にこもり勉強会を開いて、80才を過ぎてからマルクスを真剣に研究した。

その時の記録「マルクスがもし日本に生まれていたら」は商業出版され、英訳の本も出版された。鉄造は日本の為に生涯を駆けて石油の供給に励んで来た。しかし、石油は本当に人々を幸せにしたのであろうか？人類は石油など手にしなかった方が幸せだったのではなかろうか？という思いが、鉄造の胸に去来したのである。

昭和 48 年 10 月、第四次中東戦争勃発により、日本は戦後初めての「石油ショック」を経験した。そして一気にインフレが加速し「狂乱物価」と呼ばれる事態に陥った。しかし、省エネ対策が効を發し、昭和 49 年頃から沈静に向かったが、日本の高度経済成長は終りを迎えた。又、メジャーが OPEC に「石油の王」を明け渡した時でもあった。

昭和 49 年 5 月「国岡美術館」の一室で異色の対談が行われた。対談の主は、鉄造とアンドレ・マルロー（仏文化大臣）だった。マルローは義勇兵としてスペインのフランコ軍と戦い、第二次世界大戦では、レジスタン活動によってナチスと闘った。生涯を自由の為に戦った男である。また世界的文学者でもあった。マルローは「マルクスが日本に生まれていたら」の英語版を読み、国岡に会いたいと希望したのである。30 分の予定が 3 時間を超えた。対談では質問するのが一方的にマルローであった。その質問は、禅、武士道、神風特攻隊、共産主義、と多岐にわたった。又、マルローは国岡商店の出勤簿も無い、組合も無い、定年も無いというルールに驚き、何故それが他の会社に来れないのか？と訊ねた。鉄造は答えた。「社員に対する信頼がないからです」その考えは国家にも当てはまるか？とマルローは訊ねた。「あらゆることに当てはまります」「私は、人間を信頼すると言う事が日本人の世界的使命だと思っています」と付け加えた。「西欧は『物』を中心にした世界だが、日本は『人』を中心にした世界です」という鉄造の言葉に、マルローは感銘を受けた様子であった。

昭和 56 年 3 月鉄造は突然腹痛に襲われた。「腸閉塞」だった。主治医は、手術は高齢のため危険と考え、痛みを止め応急処置を施した。しかし、昭和 56 年 3 月 7 日、鉄造は 95 年の英雄的生涯を終えた。

コメントと感想

先ず、読後の最初の感想は「戦中、戦後の日本にこんなに凄い男が居たんだ」という驚きだった。又、同じ日本人として誇りに思った。本書は、日本の石油産業の歴史書であると同時に、石油に関する世界近代史の一面を併せ持っている。

あの時代、現神戸大を卒業しているにも拘らず、当時の大商社である鈴木商店を蹴って、社長以下 3 人しかいない、小麦と機械油を売る会社に入社したベンチャー精神、淡路島出身の大富豪の息子の家庭教師をしていた事から、その父親の信用を得、事業に必要な大金を無条件で貸してもらえた幸運と人たらしさ。また、大家族主義による従業員に対する絶大な信頼とそれに応える従業員の愛社精神の凄さ。政府の統制・規制に対する根っからの自由主義の精神、最もすごいのは、自分の会社の興亡より国家の為と言う愛国心。こんなすごい日本人が居たのだ。もう一つ強調しておきたいのは、当時の銀行家トップの企業融資に対する決断の凄さである。融資企業のトップの「人物」を観て、資本金の何倍ものカネを融資するリスクの取り方。「クレジット・スコア」の最大の評価は、経営者の人物であることは今も変わらない。結局、事業は「人」なのである。

原発事故以来、日本で再びエネルギー問題が注目を集めている。過って日本は、石油で戦争をし、石油で戦争に敗れ、そして石油に支配されたのである。その延長線に、石油の取れない日本の「原発」があるのである。主人公が、「人類にとって石油を手に入れなかった方が幸せだったのではないだろうか」と自問自答するのが印象に残った。

「日本の将来の姿」を考える上で、本書の主人公の考え方、生き方は大変参考になる。この中に、真の日本人の DNA が宿っている。「日本国をブランド化」する時、この心がブランドの中心になるであろう。良い本にめぐり会えた。